



# 前置き 料金

川崎ゆきお

運命の糸、これは意図だ。そこに流れているのは、まさに底に流れている何かで、これだけは窺い知れないが、たまに見せてくれることもあるが、後の祭りだ。

「そんなものがあるのですか」

「あると言わなければ占い師はできんだろ」

「備えあれば憂いなしで、役に立ちますか」

「備えようが憂いようが、それもまた運命の内」

「はあ」

「備える動きも、また運命」

「全てが決まっているのですか」

「決まっておらん。ここにあなた、来ましたね。すぐに何も聞かずに、帰ってもよろしい。続きを聞きますか、それとも信用ならんと思ひ、帰りますか。どちらを選ぶかはあなたの自由、あなたの意志で決まります」

「それも運命で決められているんじゃないのですか。たとえば、私は、これ以上いたくないので、立ち去ることも」

「では、それが運命だったとした場合、もう少しここにいることは運命に反することになります。今なら、どのようにも決められます」

「その決めたことも運命の内じゃないのですか」

「いいことを言われる。そこなんじゃ」

「はい」

「メインのストーリーがあると仮定するのが運命。しかし、それは誰が知っておる」

「誰も知りません」

「そこに、このカラクリがあるんじゃ。だから、占い師も成立する」

「じゃ、私はどうするかを占って下さい」

「占いは予言ではない。運命のメインストリートを示すだけでな」

「何ですか、そのストリートとは」

「その人の定めじゃ。定まった道がある」

「はあ、それはもう決まっているのですか」

「駅前に二軒の喫茶店がある」

「最近喫茶店、そんなに多くないですよ。大きな駅ですか」

「仮にだ」

「はい」

「どちらの店を選ぶのかは、人生の本筋にとり、それほど重要な岐路ではない。メインじゃないので、その程度の振り幅は寛容範囲内じゃ。そう言うことではなく、本筋を語るのが占いの仕事じゃよ」

「その本筋は決まっているのですか。運命的に」

「これはのう、傾向程度じゃな」

「はあ」

「人相がそうじゃ。骨格などもそうじゃ。それで気性が多少は分かる。そういう顔、そういう体型、体質の人は、こういうことをする人が多いというデータのなものじゃよ。百パーセントじゃない。だから、別の部品も見る。目の形、眉の形、口の形。それらは全てパラメーターとなる。口とか鼻、耳などは体の別の箇所 に似ておるようにな」

「たとえば？」

「鼻の形、口の形と性器じゃ」

「ああ、それは風呂屋に行ったとき、分かりました」

「ただ、それらは大まかな傾向でな。また一つの部品だけで決まるものではない。組み合わせで決まる。ただ、それでもまだまだ傾向的な面しか分からぬ」

「傾向とは何ですか」

「似たような道を辿ると言うことだな。似ているが、そっくりではない」

「えーと」

「何かな」

「何を聞きに来たのか、忘れました」

「あなた、占いに来たのですよ」

「ああ、そうでした」

「長い前置きをした。これは追加料金が必要じゃわい」

「運命の話で、このままいるか、帰るかでは、私はいることに決めました。占って下さい」

「何を」

「だから、私の運命を」

「それは占えぬ」

「え、どうしてです。あなた占い師でしょ」

「話を聴いていなかったのか。それは予言になる。占いと予言とは違う」

「じゃ、店を間違えた」

「そうそう。ここは、判断に迷ったときに来るところだ」

「あ、すみませんでした」

「しかし、前置き料金は頂きますぞ」

「はい」

了